

# 染織物語り



大鍋でフークワンという植物の葉を煮出しているところ。成分を抽出したあとで葉を取り出し、フィルターでこして、ぬるま湯程度に冷ましてから糸を染める

チェンマイは多くの旅行者が訪れる北タイの観光都市である。ナイトマーケットでは、この地方の特産である木工や竹工芸、和紙や銀細工などの店が通りの両側に並び、さながら毎晩が縁日の夜店のようなにぎわいを見せる。ここには山岳民族の民芸品を売る店もあるが、のぞいてみても、なかなかこれといった品に出会うことは少ない。多くは手作りの風合いを装いつつも、どこか既製品の匂いがする。布地なども天然素材の顔をしながら、巧妙に化学染料を使ったものがあり、タイよりもさらに人件費の安いラオスや中国から入ってきたものも売られている。



森に囲まれ、自然に恵まれたリス族ホエイコー村

かつて山岳民族の村々を訪ねていたころは、伝統的な手織りの布地をしばしば目にすることができた。日常で使う素朴な柄のものから、晴れの日を織り込んで



彩りの美しいものまで、共通するのは素材や染料に天然のものが使われていたこと。手にとって風合いを確かめれば、背後に広がる森や自然の恵みにまで想いがふくらむ豊かさを感じられた。そんな伝統の染織物が復興しつつあるという話を聞いて、山の村に出かけてみることにした。

服部一人 [文・写真]



ホエイコー村の織物は目が詰まりコシがあるので、カバンやベルトなどに使うと持ち味が出る



同じ染色液でも微妙に色が違う。草木染のおもしろさであり、品質管理のむつかしさでもある

## リス族の村

チェンマイから北に向かって国道を走る。しばらく続いた市街地が終わり、やがて山と谷がせまり、それに沿って道も蛇行するようになる。軽くひと山越えるとチェンダオである。ここには象キャンプや観光用の山岳民族の村があり、ツーリストもけっこう訪れる。

ここから国道を離れ、点在する山岳民族の村を見ながらゆるやかな丘陵を少しずつ上り始める。道が少し細くなつたところにリス族のホエイコー村はある。チェンマイからは約80キロ、2時間ちよつとの道のりだった。山岳民族の村としては特別山深いところではなく、道も舗装され、電気も通じている。来る途中、森を切り開いて作つたトウモロコシやマンゴーの畑が見えた。村の規模、数十戸といったところだ。衛星放送のアンテナや車を持つ家もチラホラある。

タイの山岳民族の総人口約90万人のうち、リス族は4万人足らずと少数だ。山岳民族は名前のとおり、もとは山間を移動しながら焼き畑や狩猟で暮らしてきた。しかし、今は定住し、ホエイ

コー村の人々も農業や出稼ぎで生計を立てている。

タイの山岳民族はそれぞれ独自の民族衣装を持つが、リス族はとりわけカラフルな民族衣装で目を引く。女性の胸当てがついたような衣装はかわいらしく、小柄な人が多いリス族にはよく似合う。しかし、近ごろは民族衣装を着る人も少なくなった。ホエイコー村の人々も、いつもは里のタイ人と変わらぬ普段着で過ごしていることが多い。ホエイコー村でもかつては女性の手仕事として自分たちの着る物など身の回りの物は自前で作り、家の前で機織をする姿は村の日常風景だった。しかし、いつからか化繊や化学染料が回るようになると、ほとんど何のためらいもなくそちらに移行した。色鮮やかな化繊布は、自分たちが作っていた草木染よりきれいに見えたのだ。そうして草木染は廃れ、機織も年長の婦人が行なうだけになっていた。

転機が訪れたのは数年前のことである。村に外国人観光客がトレッキングに来るようになって、彼ら相手のみやげ物商売が細々と始まったのだ。村には農業以外にこれといった産業がなかったため、わずかばかりとはいえ現

金収入は貴重である。どのような物が観光客に好まれるのか、婦人たちは村に入りしめていた日本人ボランティアに相談した結果、「ありきたりの物は巷にあふれているので、手仕事と天然素材を重視して品質の高い草木染を作ろう」ということになった。

もとは森に入って山菜や薬草などを採取し生活の糧を得ることで生きてきた人たちである。この方面に関しては昔から彼らは多くの知識や技能を持ち合わせてきたはずだった。しかし、機織については問題なかったが、自然の草木染に関しては村には経験者が少なかったため、他の村の者を招いて指導を仰ぐなどして、失われた技術を補ったり、新しい工程を学んだりした。

### 奥の深い草木染の技法

一口に草木染と言っても実は非常に種類が多い。葉を集めて煮出し、抽出した染色液に糸を入れて染めるのが一般的だが、材料は葉だけに限らない。ある種の木の幹や根からは鮮やかな黄色の染料が取れる。また、マックルワという黒檀の実を使うこともある。これは水につけて熟成させた後、実をよ

くつぶしてぐちゃぐちゃにし、液を暖めず冷たいまま漬け込む。このように製法もさまざまである。

婦人たちは作業を手分けして行う。材料を煮出す間に別のグループが染め上げる木綿の糸の束を水洗いしている。染める前に糸の中にある油分を念に洗い落とすことが美しく発色させるために重要だという。糸は街で売っている工業糸を主に使い、手紡ぎの糸はまだ少量だが、ゆくゆくはすべてを手作業でやるのが目標だそう。手紡ぎの糸は太きにムラがあり、それが織り上げたときに若干の凹凸になり、いかにも手仕事のいい表情になるのだが、反面、糸が切れやすく、非常に織りにくい。

別のグループは媒染と呼ばれる液体を作っていた。これは染色液に加える添加剤で、色落ちを少なくするための安定剤として使う。灰汁を用いることが多いが、鉄分が効果的なので錆びた古釘を入れたり、土中の鉄分やミネラルを利用するため少量の泥を入れたりすることも多い。この媒染の種類や量によって発色が異なるので、慎重にやる必要があるということだ。初めに草木染の工程を聞いていたときにはシン

ブルに感じたが、実際には手間のかかる、なかなか奥の深い技があるものなのだ。

昼食をはさんで午後の日が少し傾き始めたころ、いよいよ染色液に糸を浸すハイトの作業だ。いくつものタライが用意され、いっせいに糸を漬け込んでいく。婦人たちもいささか神妙な面持ちで糸を見つめ、せつせと手を動かす。種類によって短時間で染め上がるものから、火にかけてぐつぐつと煮出すものまでいろいろだ。

黄、緑、茶、灰…… それまでは一様に生成りだった糸が染め上がり、それぞれ個性を持つようになる。あとはこれを干して乾かすだけである。

染め上がった糸を織るのは各自のセンスや個性に任されている。だいたいがベルトか帯くらいの細幅の長い布地を織り上げるが、これは織り上げた布地を服の生地そのものとして使うのではなく、肩や襟や袖口のまわりに縫い付けて飾りとして使ってきた習慣によるものだ。

ホエイコー村の機織は腰織とか地機織と呼ばれるシンプルなやり方である。長い経糸を腰の後で引っぱり、体全体でテンションをかける。体の幅より広

い布地は織れないが、大きな設備を必要としない利点がある。

こうして動き出したホエイコー村の草木染は、まだ事業というほどには大きく発展していない。現在はトレッキング客に直接販売するほかは、チェーンマイの契約しているお店に卸し、工芸作家や服飾作家の手に渡り作品の素材として使われるぐらいだ。一定の需要はあるものの、さらなる販路の開拓がほしいところだが、これは時として良質の商品を作る努力よりも難しいことがある。

今日もホエイコー村では、婦人たちが家の軒先で機織をして、集まったり裏庭で草木染をする姿が見られることだろう。それが村の新しい伝統になるかどうか、何年か後には是非また訪ねてみたいと思っている。

- 1 リンマイという木の樹皮を採取する
- 2 リンマイを煮出して濃縮すると黄緑色の染色液になる
- 3 媒染材と一緒に漬けて熟成中のマックルワ
- 4 リンマイで糸を染色。色を濃くするために何度も漬ける
- 5 赤い顔料のもとになる蘇芳の染色液
- 6 藍染め。沖縄地方の泥藍の製法とほぼ同じ
- 7 染め上がった糸は素朴な風合いを持つ
- 8 機織は単調だが根気のいる仕事
- 9 経糸の端は柱や梁にくぐられ、長さが3メートル以上になることもある



# 機織りで村おこし

タイ北部やラオスなどは、昔から染織物が盛んな地域だった。近代化により一度は廃れたものが、いまや時代の風向きが変わり、ネイチャー指向やエコロジーブームのために光があたるようになった。地域の雇用や収入源創出とともに、伝統文化の保存と継承という一石二鳥をめざして多くの村が挑戦している。



懐かしい民具も、ここでは現役

## 竹林の染織工房

バーンライパイガム（美しい竹林の家）は、チェンマイの南西約90キロのジョムトン郡にある。名前のとおり門の両脇には竹林があり、風にゆれる笹の音が涼しげで心地よい。古い北タイ様式の高床式の大きな民家を改装して工房として使っている。ここでは綿花の糸紡ぎから染色、機織にいたるまで、すべて天然素材を使った昔ながらの手作業で行なわれ、工程の一部を見学することができる。

この村の主婦だったダーおばさんが興じたもので、農閑期に地元の婦人たちが副収入を得られるように、という気持ちから始まった。伝統的にあった染織の技法を磨いて洗練さを加え、現在の商品に育てていった。手作りの素朴な風合いを残しつつ、透かしなど繊細な表情も合わせ持つ。工房の2階は小さな博物館になっていて、今は亡きダーおばさんの業績が偲ばれるほか、さまざまな民具が展示してある。チェンマイ市内にもショップがあり、そこでも商品を買うことができる。

## カレン族の郷村企業

ラゲオ村はバーンライパイガムのさらに少し南に位置するカレン族の村であるが、染織物で成功するまでは、どこにでもある普通の村だった。この村の婦人グループを率いるのはトウイ氏である。

タイ政府は、一村一品運動（各村が特産品を持つことを促進）による村おこしを積極的に提唱しており、ラゲオ村が地元で伝統である染織物を出そう、というところまでは、他所でもよくあることだったが、プロデューサー

になったトウイ氏は品質やオリジナリティを高める努力はむろんのこと、協同組合として組織化することに着手した。それまでは各戸別に婦人たちが内職的に細々とやっていた作業を改め、共同の作業場を作った。材料の仕入れ、出荷や販売は共同でおこない効率化をはかる一方、売り上げの一部を作業場の維持費など経費にあてるほかは、あくまで個人の出来高制としてやる気を促した。



ラゲオ村にあるショールーム兼ショップ。スカート、服、小物と多くのアイテムがそろ

げることができた。「旦那より稼ぐようになって、家の中ではえらそうにしている人もいるよ」とトウイ氏は笑う。実際、カラオケセットや大きなテレビのある家も何軒かある。

こうしてラゲオ村は一村一品運動のコンテストで入賞し、成功した模範村として首相が視察に訪れるまでにいった。ここまで来るにはトウイ氏のビジネスセンスが欠かせないものだった。聞けばトウイ氏は若いころに村を飛び出して以来、さまざまな職業を経験したらしい。バンコクで中国人を相手に仕入れの仕事をして、厳しい商売のやり取りをしていたこともあったそうだ。そのような経験あつてこそラゲオ村の成功談であつた。